

# 鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER

# 3

2023 Spring  
Tokushima Prefectural  
Torii Ryuzo  
Memorial Museum



コンスタンチノーブルにて  
坪井正五郎

大日本帝国東京市  
本郷区理科大学  
人類学教室  
鳥居龍蔵様



十一月十三日  
正五郎 当地着

鳥居龍蔵の師・坪井正五郎<sup>つばいしゅうごろう</sup>（1863-1913）は、1911（明治44）年7月5日から翌年3月29日まで、欧米視察のため世界一周旅行を行っています。当館には、1911年11月13日にコンスタンチノーブル（トルコ、現イスタンブール）に到着した坪井が、鳥居龍蔵にあてた絵葉書が収蔵されています。2021（令和3）年の調査により確認されたもので、鳥居と坪井の交流の様子がうかがえる貴重な資料です。  
（松永友和）

今季の逸品  
鳥居龍蔵あて  
坪井正五郎の  
絵葉書



# 資料でたどる、鳥居龍蔵の学問と生涯

## 第3章 青年研究者・鳥居龍蔵の挑戦

### －台湾から沖縄、そして千島へ

前回の第2章では、鳥居龍蔵が20歳で単身上京し、東京帝国大学人類学教室を拠点に研究生生活を開始したこと、同じ徳島出身の市原きみ子と結婚し、東京で新たな家庭を築きはじめたこと、

西暦	和暦	調査地域
1895	明治28	遼東半島調査
1896	明治29	台湾調査・第1回
		沖縄調査・第1回
1897	明治30	台湾調査・第2回
1898	明治31	台湾調査・第3回
1899	明治32	千島列島調査
1900	明治33	台湾調査・第4回
1901	明治34	木頭調査
1902	明治35	西南中国調査
1903	明治36	
1904	明治37	沖縄調査・第2回

表・初期の主な調査

また、遼東半島や5回に及ぶ台湾調査など海外での調査を実施し、自らの研究スタイルを創っていったことなどを紹介しました。これらは、彼の20代から30代前半の歩みですが、同じ頃、それと併行するかたちで、後年、重要な意味を持つことになる調査が各地で実施されています。沖縄調査、千島調査、徳島県の木頭<sup>きとう</sup>地方調査、西南中国調査などがこれにあたりますが、表に見られるように、台湾調査とほぼ交互に行われています。この章では、これらの中で、特に沖縄調査と千島調査に焦点をあて、その経過と意義について考えてみたいと思います。

鳥居が初めて沖縄を訪れたのは、1896（明治29）年、第1回台湾調査の帰途においてです。その端緒<sup>たんしよ</sup>について、自叙伝『ある老学徒の手記』には、遼東半島調査の直後に、東京帝国大学総長であった渡邊<sup>わたなべ</sup>洪基<sup>こうき</sup>から沖縄調査の必要性についての示唆を受けたことや、南方植物学の研究者で、当時台湾総督府に勤務し、第1回台湾調査に協力した田代安定の業績に触れています。田代は、植物学に加え、沖縄<sup>けつじょう</sup>の結繩（繩の結び目によって数量などを表現する習俗）や巫女に関する民俗学的な研究も行う碩学<sup>せきがく</sup>で、東京人類学会とも深い関わりを持つ、鳥居にとっての先達的な存在であり、彼から受けた学問的刺激が、鳥居を沖縄へ誘ったのです。



田代安定  
『沖縄結繩考』  
（養徳社、1945）より



蠟管蓄音機  
（鳥居が使用したものは現存していない）

沖縄調査の第2回目は、1904

（明治37）年、東京帝国大学で知己を得た沖縄出身の学友で、後に「沖縄学の父」とよばれた伊波普猷<sup>いはふゆう</sup>の誘いによって実現します。鳥居はこの調査に際して、台湾調査で成果をあげた写真撮影に加え、蠟管蓄音機<sup>ろうかん</sup>を携行し沖縄の言語や民謡を録音したといわれます。当時の記録は惜しくも散逸し現存しませんが、その先駆的な取り組みは高く評価されています。一方で、貝塚等の発掘調査も積極的に行っており、その成果から、日本の「縄紋式土器」の分布は沖縄本島付近で途切れること、また、本島の西側に位置する八重山諸島付近の土器は、むしろ台湾東岸の土器に類似する



ことなど、彼が、後に提唱することになる独自の日本人起源論、すなわち「固有日本人」論の構成要素となる「先住民族の居住範囲」と、「南方からの民族移動」を示唆する重要な成果をあげることになりました。

一方、千島列島での調査は、どのような経緯で実施されたのでしょうか。その発端は、1899（明治32）年、北千島列島北端の占守島<sup>しゅむしゅ</sup>に在住する郡司成忠から坪井正五郎に宛て、「占守島で竪穴住居<sup>きゅうけ</sup>を発見した。屋根裏には弓箭<sup>きゅうせん</sup>が遺されており、その鏃<sup>やじり</sup>はすべて骨鏃<sup>こつぞく</sup>であった。あなたが主張する、アイヌに追われて北走したコロボックルの遺物であるまいか。現地に来て調査をお願いしたい」との依頼があったことに求められます。そして坪井はこの調査を、公務多忙を理由に弟子の鳥居龍蔵に託すことにしたのです。

当時の日本人類学会では、日本の先住民、すなわち石器時代の住人を解明することが重要な課題となっていました。坪井はこれをアイヌの伝説に「落<sup>ふき</sup>の下の小人」として登場するコロボックルであると考えましたが、同じ東京帝国大学の白井光太郎<sup>しら</sup>や小金井良精<sup>いみつたろう</sup>等<sup>こがねいよしきよ</sup>はアイヌ（現在のアイヌ民族とは異なる縄文土器を用いる人々）であると主張し対立していました。これを「コロボックル・アイヌ論争」といいますが、鳥居の千島調査は、この論争に大きな影響を与えるものとなります。彼は現地調査の過程で、千島アイヌは竪穴住居に住み、近年まで石器や土器を製作していたこと、コロボックルは伝説上の存在であることを確認し、その成果を『千島アイヌ』という書物にまとめ公表したのです。恩師である坪井の学説とは異なる見解に到達したわけですが、これ以降、日本の石器時代人をアイヌであるとする説が有力になっていきました。鳥居にとっての千島調査は、日本列島の先住民を特定する意義を持つものであり、沖縄調査と同様に、「固有日本人」論形成の前提となっていたのです。

（石井伸夫）



コロボックルの想像図  
東京大学総合研究博物館蔵



鳥居龍蔵著『千島アイヌ』



調査時の船上で披露されたアイヌの人々の踊り  
東京大学総合研究博物館蔵



# ゆかりの地 今昔

今回は、鳥居龍蔵の「ゆかりの地」として、徳島市上八万町に所在する、弥生時代中期の銅鐸が出土した「美田遺跡」について紹介します。

1932（昭和7）年、徳島市上八万町<sup>ほしごうち</sup>星河内の美田地区で銅鐸が発見されました。この銅鐸は、出土地の美田遺跡にちなんで、「星河内美田銅鐸」（以下、銅鐸）と呼ばれています。

同年、地元の研究者である森敬介（1888 - 1947）が調査を行い、後年、報告が『名東郡史』<sup>みょうとう</sup>（1960年発行）に掲載されました。その概略は、次のとおりです。

- ①銅鐸は8個発見され、丁寧に掘り出された。
- ②埋納方法は、中央に3個が重ねられ、その周囲に1個ずつ配置されていた。
- ③銅鐸は粘土層内にあり、掘り出すことができたものも、触れるとバラバラになった。
- ④掘り出された銅鐸の破片は、全て他者の手に渡ったが、森は銅鐸を実見した。

さらに、1933年と1935年の2回、鳥居龍蔵が美田遺跡の調査を行いました。写真1は、鳥居が監修した『川内村史 上篇』<sup>かわうち</sup>（1937年発行）に掲載されたものです。楕円で示した人物の辺りが銅鐸の出土地です。鳥居は、遺跡を念入りに調査しましたが、銅鐸は既に他の場所に運ばれていたため、直接見ることはできませんでした。そこで、鳥居は、掘り出した本人や関係者から、出土した銅鐸は小型であり、その数は7個であったとの情報を得ています。なお、『名東郡史』の記載と出土数の違う理由は不明です。そして鳥居は、美田遺跡では、古い形式の銅鐸が多数発見されたことから、今後、注意して研究すべき地域であると結論付けています。

さて、2002年、徳島県立博物館が、各所に分散して保管されていた銅鐸の調査を行いました。すると、少なくとも7個体分以上の破片が存在し、極めて薄手で扁平な小型の銅鐸であることなどがわかりました。現在、徳島県立博物館では、所蔵する銅鐸の破片を、常設展示室に展示しています（写真2）。これは、鳥居が見ることが叶わなかった銅鐸の一部です。機会があれば、ご覧いただきたいと思います。

さらに、銅鐸の出土した場所には、2004年に上八万町文化おこし委員会が建てた標柱があります。こちらも、ぜひ一度、現地でご確認ください。



写真1 銅鐸の出土地  
「川内村史」（1937）の図版より転載



写真2 星河内美田銅鐸の一部  
徳島県立博物館提供

（下田順一）

# 資料整理 の最前線

ここでは、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の館蔵資料整理作業の成果のなかから、未公開の資料を中心に紹介していきます。第3回は、鳥居の東大での役職に関する辞令に焦点をあてます。

鳥居龍蔵は、東京帝国大学（以下「東大」）教授坪井正五郎の誘いを受けて上京し、東大でキャリアを重ねていきました。まず人類学教室標本整理係として雇用され、1898（明治31）年には正規の教員である助手になった後、講師を経て、1922（大正11）年に助教授に就任しました。しかし、当時の「講師」には注意が必要です。

鳥居龍蔵記念博物館では、現在、東大に関係する鳥居宛ての辞令14点を確認しており、ここには、そのうち講師に関するものを掲載しました。写真1は1905（明治38）年、理科大学（現在の理学部）の講師を解嘱かいしょくしたもの、写真2は翌年、講師を嘱託したものです。

従来、鳥居は1905年に講師に昇進したとされていましたが、その根拠は、鳥居博士顕彰会編『図説 鳥居龍蔵伝』（同会、1965年）に掲載されている同年7月28日の辞令にあります（写真3）。ところが、資料整理を進めていくと、写真1・2のように、講師に関するものがほかにもあることが分かりました。これらによって、鳥居は、1905年に講師に嘱託された後、同年それを解かれ、さらに翌年再び講師に嘱託されるという、やや複雑な動きが知られるのです。

では、鳥居の講師嘱託は何のためだったのでしょうか。そこで注目したいのは、写真1～3に「休職東京帝国大学理科大学助手」と記されていることです。助手を休職した鳥居に講師の嘱託や解嘱がなされているのです。講師としての鳥居は、1905年に中国東北部へ、1906年にはモンゴルへ、それぞれ大学から出張を嘱託されました。このことから、海外調査によって助手の職務が遂行できない場合に、休職と引き換えに講師嘱託によって東大教員としての身分を保障する措置がとられたと思われます。これを、鳥居や周囲の人たちは、上位の職への昇進と認識しており、不思議な感じがします。無味乾燥に見える辞令にも、検討しなければならない課題があるといえます。

（長谷川賢二）

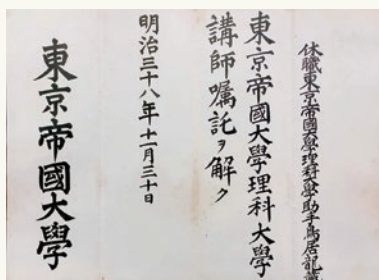


写真1 講師解嘱辞令（1905年）

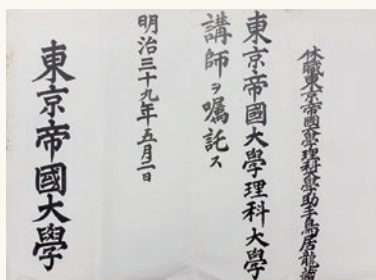


写真2 講師嘱託辞令（1906年）

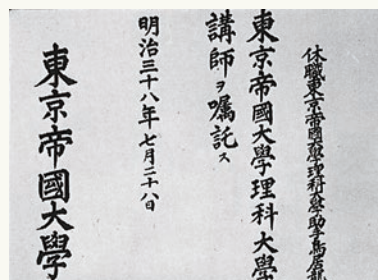
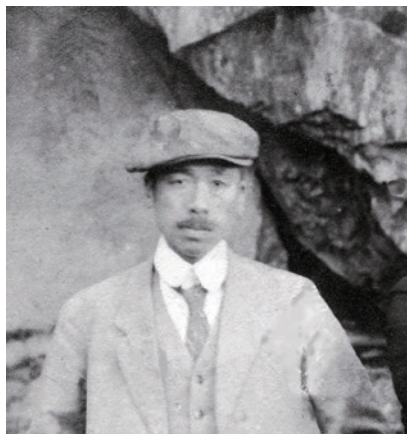


写真3 講師嘱託辞令（1905年）  
（『図説 鳥居龍蔵伝』より）



# 龍蔵を巡る人々 一碩学と社会の インターフェイス



城山貝塚調査時の写真（当館蔵）

## もり けい すけ 森 敬 介

森敬介（1888 - 1947）は、徳島県内で小学校の先生（くんどう訓導）をしながら、徳島人類学会、阿波郷土研究会などに所属して活動した郷土史家です。鳥居龍蔵のしんぼうしや信奉者として知られています。

彼は1888（明治21）年2月に、徳島市大工町で森直次郎の四男として生まれ、1909年に、同じ大工町に住む森シケリの養子となります。近年の調査によると、兄に森政一（だいちゆう号大中、1879 - 1968）がいたといわれます。政一は藍商

森家の一族とみられるそほうか素封家であり、日本画、茶の湯、さくとう ようきよく作陶、謡曲など、阿波商人の文化を体得した名士として聞こえ、息子堯之も洋画家になりました。

敬介は徳島県師範学校を卒業し、徳島市佐古尋常小学校、名東郡黒田尋常高等小学校、名東郡八万尋常高等小学校、名東郡加茂名尋常高等小学校に勤務します。そのかわら、郷土史家の前田正一とともに「み三タカラ研究所」を設立し、岩石、鉱物、化石の採集にはげみます。敬介は、つねづね徳島特産の岩石が使われた太古の石器が見つかるはずと考えていました。そして1917 - 18（大正6 - 7）年ごろ、名東郡加茂名町の椎宮神社の山麓で、りよくしよくへんがん緑色片岩製やこうれんせき紅簾石片岩製の石斧などを発見し、知人を介して、東京にいた鳥居に鑑定を頼みました。緑色片岩は「阿波の青石」とよばれるほど身近にあり、紅簾石片岩は徳島市の眉山にあるものが世界的に有名でした。

鳥居は1922年に徳島に帰り、県内各地をまわり、徳島公園内で城山貝塚を発見します。敬介は徳島駅ではじめて鳥居と対面したとき、鳥居から「君の発見した椎宮附近の遺跡を調査に来た」と告げられ大いに感激します。これ以後、鳥居が行った城山貝塚の発掘に加わり、徳島市勢見山岩の鼻の開発をめぐる問題で鳥居に助力を乞う手紙を送り、徳島市三谷遺跡の発掘にたずさわり鳥居と連携するなどしました。三谷遺跡の発掘については、ニュースレター2号に掲載された「ゆかりの地今昔」をお読みください。

敬介の意外な一面にふれておきます。彼は岩石や鉱物だけでなくしょがこつとう たぐい書画骨董の類も集めました。ニュースレター2号で紹介した須木一胤（1873 - 1936）と面識があり、ともに古書画の鑑賞会に出席しています。また画家の団体であるきんでいかい金泥会の同人として日本画を発表しています。画名は「森紅簾」ですが、紅簾石片岩にちなむその号に敬介の思いがにじんでいます。

（大橋俊雄）



## 鳥居龍蔵研究に思う

# 鳥居龍蔵の鹿児島調査

大原 賢二

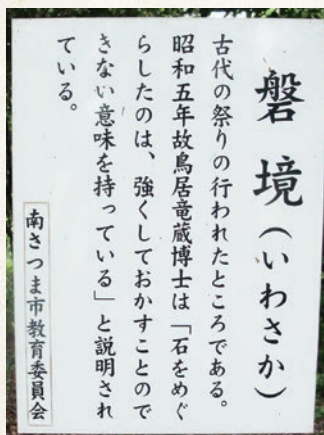
「鹿児島県と熊本県の地名と思われるメモの書かれたスケッチがたくさんあります」と、資料を整理してくれていた方がいます。確かに、A4サイズ位のケント紙のような紙には、出土資料や風景などの横に多くの鹿児島・熊本の地名が記されています。スケッチは、私の出身地である鹿児島県のものだけでも、200枚を越えるほどでした。



竹屋神社で調査する龍蔵親子



現在の竹屋神社裏の様子



竹屋神社の調査地点の説明板

鳥居龍蔵と娘の幸子さんによる鹿児島県の調査は、雑誌『武蔵野』あての手紙などでその概要はわかっていたのですが、これほどの資料が残されているとは思いませんでした。そこで、まずはスケッチに記されたメモと日付をもとに、龍蔵親子の行程を調べましたが、詳細はわかりませんでした。しかし、当時、鳥居龍蔵記念博物館の学芸員であった石尾和仁氏から、地元の新報に調査の記事が出ている可能性を示唆され、鹿児島県立図書館で調査時の新聞マイクロフィルムを調べたところ、鹿児島新聞社が龍蔵親子に同行し、ほぼ毎日記事を書いていたことがわかりました。新聞には1930（昭和5）年3月2日に東京を発ち、同月22日にいたる鹿児島県内の調査が報道され、県が提供してくれた自動車で移動したことなど、調査の詳細が判明しました。

そして、私は帰省した時に、龍蔵親子が調査した場所を探して歩いてみました。大隅半島はあまり見られませんが、湧水町の五輪塔群や、指宿市の有名な橋牟礼川遺跡や枚聞神社、玉ノ井などは位置もわかりやすかったです。万世の竹屋神社（現、南さつま市）は、特に興味深いです。

龍蔵親子が最初に訪れた日は、途中で車がぬかるみにはまり十分調査できず珍しく再度調査した場所で、神社裏の石を積み重ねた部分にある説明板は、かつて鳥居龍蔵が来たことを明記しています。現存する石積みは、龍蔵が調査で中央の石を持ち上げさせたため、当時の写真と位置が異なっています。

各地で行った龍蔵の調査写真は多く残っていますが、スケッチがこれほど多く残されていることは非常に貴重で、幸子さんのスケッチの精度の高さもわかります。その後、鹿児島県のスケッチの詳細については、同県の文化財調査で多くの実績がある池畑耕一氏に内容の調査を依頼し、その詳細も判明しました。これから調査地の現状などを含めた解説書などが発行できるのを楽しみにしています。

（元鳥居龍蔵記念博物館長）



## 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラムより

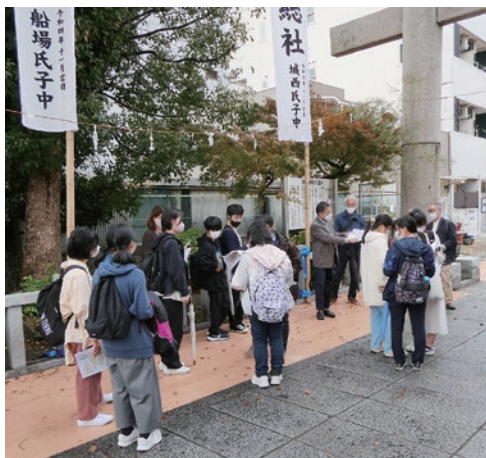
鳥居龍蔵の研究の基礎は、自主的にフィールドワークを重ねた10代に築られました。10代の鳥居は、読書に励むだけでなく、各地の遺跡の様子や人々の生活について現地を訪ねて調べ、その知見をまとめて全国的な学術雑誌に投稿しました。

現在、当館では、若き日の鳥居の活動にならい、徳島県立博物館と共同して中・高生による自主研究を支援するため、毎年二つの「歴史文化フォーラム」を実施しています。一つは、徳島県内の中・高生を対象とし、平成28年度に創設した「鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム」であり、もう一つは、鳥居の生誕150周年を記念し、令和2年度に創設した「鳥居龍蔵記念 全国高校生歴史文化フォーラム」です。

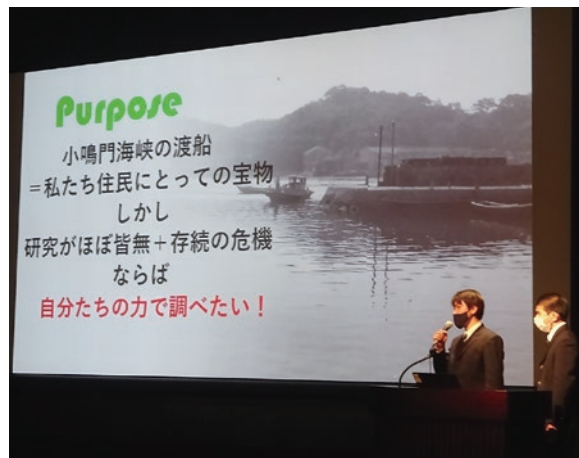
二つのフォーラムとも令和4年度も中・高生から多くの応募をいただき、2月18、19の両日には発表会を実施しました。どの研究も、地域の特色や、応募者各人の問題関心が色濃く反映され、とても興味深い内容でした。こうした取り組みは、博物館と学校現場を結ぶ「博学連携」として重要で、中・高生の自主的な学習活動の場として、ぜひ活用いただければと思います。

また、「徳島歴史文化フォーラム」においては、ガイダンス講座と、現地研修会も実施しています。今年度は7月17日（日）にガイダンス講座「フィールドワークに挑戦！」として、徳島市国府町内の遺跡や資料館を巡りました。さらに、11月13日（日）には、現地研修会「文化遺産を巡る旅」として、兵庫県の姫路城及び姫路城下町を巡るバスツアーを行いました。あいにくの雨天にもかかわらず、参加者は熱心に山上雅弘氏（兵庫県立考古博物館）と大村拓生氏（兵庫県立歴史博物館）の解説などに聞き入り、充実した内容になりました。

今後も、二つのフォーラムへの積極的なご応募を心よりお待ちしております。



姫路城下町での見学の様子（2022年11月13日）



フォーラムでの発表の様子（2023年2月18日）

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER No.3

発行年月日 2023年3月20日

編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園内）

TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197

<https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp>